

編 輯

昭和33年度は本学にとつても又本研究所にとつても悲しむべきことが相ついで生じた。というのは34年2月4日に本研究所所長代理横山将三郎氏が胆汁性腹膜炎のために、二週間おいて同月19日には本学第3代学長小岩井浄氏が膵臓癌のために御逝去なされたのである。両氏とも本学創設以来その発展のために又本研究所のためになみなみならぬ御尽力下されたことは申すまでもない。謹んで哀悼の意を表す次第である。

故横山将三郎氏は本研究所初代所長秋葉隆博士なきあと以後4年にわたつて所長の重責につかれ、本研究所の発展充実に力をつくされるかたわら、渥美半島をはじめとする東三河一帯の考古学的研究に専心され学界に大きな足跡をしるして来られた。その成果は逐次本紀要に発表されて来たのであるが体系化を試みるにいたらずして不帰の客になられたことは、氏はもちろんのこと斯界にとつても本研究所にとつても大きな損失であるといわなければならない。氏が本輯のために用意された遺稿「一宮村上長山古墳発掘調査報告」をも

後 記

つて本輯の巻頭をかざることができたのはわれわれにとつてせめてもの慰めである。

蘊蓄された学識と剽々乎として常々ユーモアを忘れない大人の風格を兼ねそなえられた氏を再び研究所に見出すことができないのは何にもまして淋しいことではあるが、所員一同は氏の遺志を受継いで郷土研究という地味な、そして各種の困難の伴う事業に対して不断的努力を続けて行くことを誓うものである。ここに本輯を氏の霊前にささげて心から御冥福をお祈りする次第である。

なお昭和33年度から文学部教授鈴木泰山氏(日本史)、同助教授堀井令以知氏(言語学)、昭和34年度から法経学部講師見城幸雄氏(法制史)が新しく所員として参加されることになり、その活躍が期待されている。開設10周年を迎えるまで本研究所は秋葉初代所長の御逝去をはじめその間にいろいろな苦難や悲しみに遭遇して来たがそれを克服して堅実な前進を続けているのである。今後とも大方の御叱正御鞭撻をいただければ幸甚と存ずる次第である。(M)